

「継ぐと(じつ)と」

大島泰子

去る五月十六日、「喜多流春の会」にて伊織が無事に〈初面〉「花月」を舞い終えた。当日、NHK広島支局より取材のカメラが入り数日後、二十分足らずのニュース番組に編集されたものが放映された。その番組中、三十数年前に我が家の稽古風景を取材した映像が織り交ぜてあり、実に懐かしく見ることができた。故久見父が七十二才頃、主人政允が四十六才頃、輝久が十一才頃の親子三代の稽古風景が映し出されたのだ。我々夫婦はあの頃の久見父の年を越していることを改めて認識させられたが、次の時代へ能のバトンを渡す使命を何とか果たしていることを確認できた嬉しい映像でもあった。



〈初面〉「花月」シテ 大島伊織  
2021年5月16日 喜多流大島能楽堂

更に番組の終盤で伊織の言った言葉に不覚にも驚いた。「お父さんぐらいすごい人になりたい。」

輝久は催しがあるたび毎月のように福山に帰省しているし、毎日のように電話やメールで仕事の連絡はしているが、私にとってはいつまでも手のかかる頃の息子のままであったのだ。彼が父親として能の指導者としてどれほど努力してきたのか、伊織の言葉で改めて認識することになった。

この四月で中学生になり随分と背丈も伸びた伊織だが、コロナ禍のため昨年上演予定だった演能が本年度に日程変更になり、まだ子方としてのお役も務めている。しかし、伊織が能のバトンをしっかりと受けとろうと努力していることを確認できた〈初面〉「花月」だった。